

# 「子どもの「ひとり遊び」の発達の意義

—自我の発達との関連において—

戸次 佳子<sup>\*</sup>

## Meaning of children's solitary play with respect to the development of self

Yoshiko BEKKI

### abstract

Parten, M.B. (1932) categorized plays of children in the context of their social development. According to his theory, children begin to play with peers cooperatively as they grow older. However we often observe a child who plays alone even if he/she can play with peers together. In order to understand the meanings of solitary play, I observed playing activities of preschool children. Out of 6 observations of playing children, I chose 2 cases for discussion. The first case was a 5-year-old boy who built blocks to make a tunnel. The second case was a 4-year-old boy making a paper toy with scissors. In both cases, children were talking to themselves, and through their monologues, they corrected their maneuvers, invited new strategies and attained their goal. According to Wallon H. (1983), children make conversations with the second ego in their mind, and these conversations developed one's ego. Based on his theory, I assumed that when a child plays alone, he/she may talk to oneself in his/her mind. In this study, I tried to understand the meanings of their monologues while they played alone. It is proposed that inner conversation that I observed in this study might attribute in building their self.

**Key Words : Solitary play, Preschool children, Inner conversation, Development of self**

### 1. 問題と目的

遊びとは何か、人間はなぜ遊ぶのか、これまで多くの研究者たちが「遊び」について議論を重ねてきたが、遊びが子どもの成長にとって重要な役割を果たしていることは、誰もが認めるところであろう。スイスの心理学ピアジェは、新生児や乳幼児が、自分の限られた感覚と運動能力を使って環境との積極的なやり取りをすることを観察し、このような自己の体を使った遊びが自らの認知構造を構築し発達させていく

---

キーワード：ひとり遊び、幼児、自己内対話、自我の発達

\* お茶の水女子大学大学院博士課程

と考え、この時期を感覚運動的活動期<sup>1</sup>と捉えた（Piaget, 1945/1968）。このピアジェ理論に従えば、ヒトは生まれてまもなくひとり遊びを始めると言えよう。一方、認知発達の側面からでなく、社会性の発達の観点から子どもの遊びを分類したのが、パーテン（Parten, 1932）である。パーテンは、子どもの遊びを、何もしていない遊び、傍観的遊び、ひとり遊び、平行遊び、連合遊び、協同遊びの6つに分類した。パーテンのこの分類に従えば、協同遊びができるようになることは、子どもの社会性の発達の1つの目安であると考えられる。パーテンのこの分類は、保育的また発達の研究においてよく引用されている。一方、医学的側面からも、子どもの遊びにおける社会性の発達は重要な研究の対象である。これまでの研究の結果、対人関係に困難を抱えている発達障害である自閉症スペクトラム（ASD）の子どもには、ひとり遊びが多く見られ、早い段階での適切な支援の必要性が議論されている（田辺・田村, 1997, 新垣・浦崎, 2010）。

ところで、協同遊びができる子どもでも、ひとり遊びを黙々と続けることは、しばしば観察される。多くの子どもたちが互いにに関わり合いながら遊ぶ姿の中に、そのようなひとり遊びを見かけると、幼稚園や保育園の保育者にとっては、やはり「気になる」ことであるようだ（久保山・齊藤・西牧・當島・藤井・滝川, 2009, 牧野, 2011）。しかし、「ひとり遊び」は必ずしも心配なことではないと主張する研究もある。田窪・堀越（2012）は、幼稚園児におけるひとり行動の変容を観察し、集団に関わる前の気持ちの切り替えとして、また、ひとりで集中して取り組む時間として、ひとり行動の意義や重要性について述べている。また、進野ら（1993）は、一年間に渡って3歳児と4歳児の遊びを観察した結果、年齢の上昇に伴いひとり遊びの発生数は減少しているものの、ひとり遊びの継続時間は上昇していると報告している。一方、ひとり遊びのプロセスに重要な意味付けを行ったのは、日本では浜野・佐藤（1988）の研究がある。浜野らによれば、幼児期の一人遊びの時間は、他者に妨げられずに自分の中に持っているイメージを表現できる時間であり、その積み重ねの中で様々な物事の特徴を自己の中に取り入れ、自我の拡張につながる重要な意味のある時間であるという。これらの研究は、ひとり遊びに没頭することが、協同遊びと同様に子どもにとって発達の意味があることを議論した貴重な研究であるといえよう。

ここで、我々大人について考えてみたい。我々は、大人になっても、一人で考えたり一人で創作したり、一人で趣味に没頭したりすることは少なくない。また、文章を書くときはもちろんのこと、集団で議論するときでさえにも、その前に、まずは一人でじっくりと書物を読んだり、自己内対話をしながら自分の考えを深めたり整理したりする時間は欠かせない。我々人間にとって、集団で関わり合う時間を持つことが大切であると同時に、一人で何かに熱中する時間も重要な意味を持つことは自明である。子どものひとり遊びも、成長に伴って必要がなくなるものではなく、集団遊びができるようになったのちにおいても、必要不可欠なものではないかと考える。

身体・自我・社会性は互いに切り離せないもので、子どもの発達をどの視点から切り込むにせよ、そこから見えてくるものは常に全体性の一つの現れである（ワロン, 1983）とするワロンの行動と思考に関する認識論は、筆者が子どもの「ひとり遊び」における思考過程について考えるときの示唆を与えた理論である。

「動作は、環境を変えると同時に、その動作を作る人を変える」（ワロン, 1942/1976）。また、他者は意識において自我と同じぐらい内的現実性を与えられており、また自我も他者に劣らず外在的様相を帯びているという。（ワロン, 1983）。このことは、本研究がめざしている「ひとり遊び」をする子どもの自我の発達を見る視点にも、他者との関わり遊びと同様、子ども自身を変えるような重要な意義を見いだすことができるということを示しているであろう。また、柴山（2008）が述べているように、子どもの身体活動は、自己を作り上げる基盤であると同時に自己表出や対話の手段であるといえる。このことから、表出された身体活動を詳細に観察すれば、行為者の自己内対話や自我の発達が読み取れるのではないかと考えた。

本研究では、ワロン（1942/1976, 1983）の「行動と思考の認識論」の理論を一つの手がかりとして、「ひ

<sup>1</sup> ピアジェは、子どもの行動や遊びを、思考過程や認知構造の発達から4つの主要な段階①感覚運動期②前操作期③具体的操作期④形式的操作期に分類した。

とり遊び」における子どもの身体の活動を通して自己内対話を推察し、自我の発達を考えることを目的とする。

## 2. 観察 I 幼稚園児の観察

### 2-1. 研究協力者・観察期間・方法

東京都内の A 幼稚園において、2011 年 2 月から 5 月の幼稚園の保育時間に園児の自由遊びの参与観察を行った。また、東日本大震災のため、3 月と 4 月は予定の観察ができなかったため、追加観察として 2013 年 10 月と 12 月にも観察を行った。観察回数は全部で 6 回であった。時間は各 2 時間程度、参与は消極的な参与<sup>2</sup>で、その場でメモを取り、のちにエピソードとして記録した。A 幼稚園は、大学構内にある附属幼稚園で、自由遊びを中心とした保育を行っている。園児は年少から年長までの 3 年保育と、年中から入園する 2 年保育の、合わせて約 170 名である。起伏に富んだ地形を生かした園庭をもち、都会にありながらも自然豊かな環境に恵まれた園である。

### 2-2. 事例の選出と分析

記録された事例の中から、本論文では、室内でのひとり遊びを取り上げる。6 回の観察のうち、記録されたひとり遊びは 5 事例であった。内訳は、積み木遊びが 2 事例（5 歳男児 2 名）、はさみを使った遊びが 2 事例（5 歳男児と 4 歳男児）、ガムテープと穴開けパンチを使った遊びが 1 事例（4 歳男児）だった。観察の結果、子どもはひとりで遊んでいる時、どの子どもも自発的に試行錯誤的な行為の繰り返しを行っていることがわかった。このような行為を、筆者は、子どもの自発的な「自己の行為の結果の検証と修正のプロセス」と捉え、これらの身体活動は、身体を作り上げる基盤であると同時に自己表出や対話の手段である自我の表出そのものであると考えた。

内田（1989）は、子どもの作文の遂行過程において、「自己内対話」を意識的に行わせる方法で、表現意図と表出された表現とのずれを修正する過程と、その過程における認知変容について分析研究した。また、上西（2008）は、コラージュ画の制作過程には、行為と内的他者との自己内対話のプロセスを持っているという仮説のもと、コラージュ画制作のあとで、その過程をインタビューする手法で分析考察を行い、制作の中では常に少し離れて他者が見るように、自分の作品を見ながら「自己内対話」を行い、それによって生まれる「ズレ」とそれを埋めようとする「修正」の行為が行われていることを見いだした。これは、作文の推敲過程においても、コラージュ画制作過程においても自己と第二の自己との対話が行われていることを示している。

ワロン（1983）は述べている。幼い子どもによく見受けられる自分自身との対話である独り言は、自我が確立していく 3 歳頃になると消えていくが、それは、自分自身との対話がなくなったということではなく、潜在的な第二の自我との会話として生き続けている。前出の内田（2009）も、ヴィゴツキー（1932/1967）を引用して、子どもの発達過程における内言について言及している。独り言は、問題解決のための考えるためのことばが、その内面化が不完全なため外に現れたものである。そして、子どものことばは、自己中心語の多く見られる 5、6 歳頃に枝分かれして一方は伝達の手段としての外言として洗練され、他方は思考の手段として内言に発展するという。

本研究では、幼児の一人遊びのプロセスを検討する。行為者が幼児であるため、内田（2009）のように対象者に自己内対話を語らせたり、上西（2008）のようにインタビューしたりする方法は行えない。ワロンの

<sup>2</sup> フィールドで観察者以外の役割を担わずに観察をする立場（柴山、2008）

「自我の二重性」の理論を援用し、子どもは、自分の中に第二の自我をもち、その内在する他者と自己内対話をしながら遊びを進めていると仮定して、ひとり遊びのプロセスの分析考察を行った。本研究において、子どものひとり遊びは5事例認められた。そのうち、子どもの発話や行為から、こどもが「遊びにおいて一定の満足感を得られた」と認められた場面が観察された事例は、積み木遊び2事例とはさみ遊び1事例であった。本論文では、そのうち、自己の行為の結果の検証と修正が繰り返し行われた5歳男児の積み木のトンネル作りと4歳男児のはさみを使った遊びを取り上げて考察する。

### 3. 結果と考察

#### 3-1. 事例1

自分の行為の結果を検証し、修正しながら繰り返す事例

表1 B男（5歳男児）の積み木のトンネル作り（下線部は、分析して考察する行為や発話、以下同様）

<p>保育室の入り口近くで積み木を積んで遊んでいるB男は、20cmほど離れておかれている大型積み木のそれぞれの上に、直方体（約3×3×15cm）の積み木P1・P2を一つずつ立てて、その上に直径5cm長さ20cm程の半円柱の細長い積み木Qを、上に渡すようにのせてトンネルを作ろうとしている。①しかし、半円柱の積み木Qの長さが少し足りないため、うまくのせることができない（図1）。</p> <p>そこで、B男は、②両脇の直方体の積み木P1・P2の位置を少し内側に寄せて、半円柱の積み木Qをその上にのせようとした。しかし、まだ、半円柱の積み木Qの長さが足りず直方体の積み木P1・P2に届かない。③再びB男は、両脇の直方体の積み木P1・P2を微調整して、大型積み木から内側にはみ出すようにして置き、半円柱の積み木Qをのせようとした。しかし、まだ届かない。するとB男は、④もう一度丁寧に直方体の積み木P1・P2を内側に寄せて、半円柱の積み木Qをのせた。半円柱の積み木Qは、2つの直方体の積み木P1・P2の上に、ぎりぎりに収まってのった（図1）。</p> <p>次にB男は、そばにあった別の直方体の小さい積み木をその上にのせた（図1）。少しぐらっとしたが、積み木を崩すことなく、Qの上に小さい積み木をのせることができた。そして、⑤もう一つ別の小さな直方体の積み木をまたその上にのせようとして、上に持っていったが、やめて、そのまま積み木を床においた。⑥「よし」と一声発すると、友達の方に走っていき、積み木のトンネルを通るビー玉転がしを友達と一緒に始めた。</p>
--

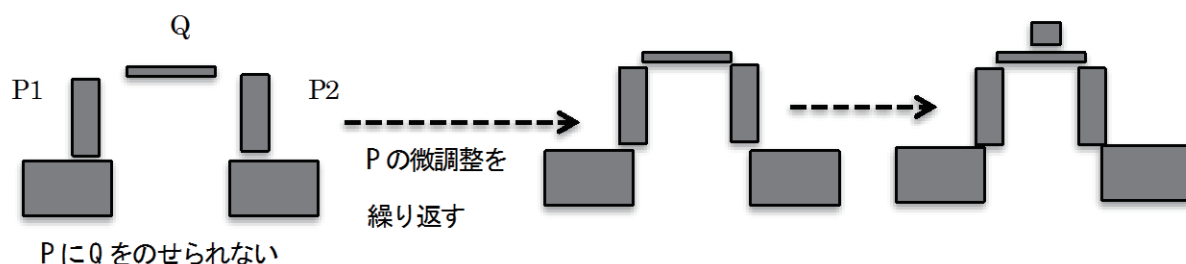


図1 B男（5歳男児）の積み木のトンネル作り

B男は、2つの15cm程の長方形P1・P2の積み木の上に、半円柱の積み木Qをのせることがうまくいかず（下線部①）、積み木P1・P2の位置の調整を3回繰り返した（下線部②，③，④）。P1・P2の積み木は下の大型積み木からはみ出すようにのっけていて、ぎりぎりのところの微調整であった。この微調整は、B男が自分の行為の結果を見ながら自発的に行為の修正を行っていると考えられる。その結果、Qの積み

木はP1・P2間のぴったりのところに載せることができた。これは、B男が、積み木遊びの中で、自発的な試行錯誤的繰り返しを行った結果の成功体験といえる。また、B男は、やっとのせられた半円柱の積み木の上に小さな積み木をのせた後、さらにもう一つの積み木を載せようとした。B男は、その3つ目の積み木を手にとって、積み木のトンネルの上まで持っていき、そこでのせるのをやめている（下線部⑤）。これは、それまでの成功体験をもとに、自己の行為の先の結果の見通しをもつことによって、失敗を回避した行為であり、B男が発した「よし」という言葉には、自己の行為に対する満足感が表現されている（下線部⑥）。これらの行為から、行為者自身の自己内対話を推測し、『身体・自我・社会』（ワロン、1983）（p.117）の浜田のモデル（図2）を援用して、一連の遊びのプロセスを表2に示した。

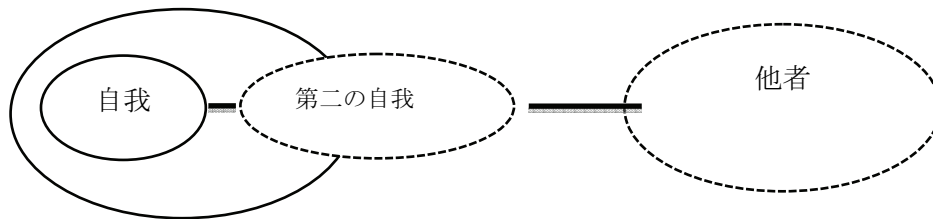


図2 ワロンによる自我の二重性のモデル

表2 第二の自我と対話しながら行為の修正を自発的に行う遊びのプロセス（事例1）

遊び	表出された行為や発話	自発的に自己の行為の修正を繰り返す自我	自己の行為を検証する第二の自我	他者
積み木のトンネル作り	①	上にのせる積み木が短すぎるなあ・・・ ↓（修正）	もっと下の積み木を内側に寄せないとだめだ。	少し離れたところで、友だちが積み木のスロープを作って、その上にビー玉を転がして遊んでいる。
	②	このぐらい寄せれば積み木が上にのるかな？ ↓（修正）	あれ？まだダメだ。もっと内側に寄せないと。でも、あんまり寄せると、下に落ちちゃうかも・・・	
	③	よし、少しだけ内側に寄せよう。落ちないようにそっと・・・ ↓（修正）	まだだめだ。でももう少しだけ寄せれば、うまくのりそうぞ。	
	④	もう一回ほんの少しだけ寄せて・・・今度こそ！	よし、いいぞ、うまくいったね。	
	⑤	1つのせたから、もう一つのをせてみようか。 →（失敗の回避） そうだね、崩れたら大変だ。もうやめよう。これでいい。	もうやめた方がいいと思うよ。 （失敗の回避）	
	⑥	よし、大成功！	大成功だね！	



B 男は、積み木のトンネル作りの遊びの中で、第二の自己と対話しながら自己の行為を自発的に検証し修正することによって、成功体験を積み重ねた。これは、ワロン(1942/1976)のいう、身体を通して自我を確立していく過程と見ることができる。

### 3-2. 事例 2

自分の行為の結果を検証し、修正しながら新しい方法を試みる事例

表 3 C 男（4 歳男児）のはさみを使った遊び

<p>C 男と D 男と E 子の 3 人が大きなテーブルのところに座っている。D 男は紙をはさみで切って遊んでいる。E 子は、紙にカラーペンで車の絵を描いている。C 男は、両手をテーブルの下の上の膝の上において、D 男と E 子の遊びをじっと見ている。E 子は車の絵を描き終わると、その周りをはさみで切って、「はい、あげる」と言って C 男に渡した。</p> <p>その後、D 男と E 子が遊びをやめてテーブルを離れると。C 男は、①<u>立ち上がって E 男が遊んでいたところに行き、机の上にあったはさみを手に取り、その横にあったピンクのリボンを切ろうとした。</u>しきりに舌を出してはさみを動かしているが、②<u>うまく切ることができない。</u>何度もはさみをあてたりリボンは少しよれよれになってきた。</p> <p>すると、C 男は、③<u>ピンクのリボンをテーブルにおいて、そばにあった箱の中から黄色いリボンを引っ張り出してはさみで切った。今度は一度でリボンをうまく切ることができた。</u>そして、そのリボンを机の上の紙にセロテープで貼り付けた。</p> <p>次に、C 男は④<u>立ち上がって、棚から広告のくるくる巻いて棒状にしたもの（教師が作ったもので、やや固さがある。ここでは、「広告のくるくる棒」と名付ける）を持って来て、はさみで切ろうとした。</u>しかし、⑤<u>うまく切れない。</u>C 男は、またしきりに舌を出して手指に力を入れている。何度か繰り返したのち、C 男は、⑥<u>両手ではさみを持ち、力を入れた。すると広告のくるくる棒はきれいに 2 つに切れた。</u>C 男は、2 つに切れた広告のくるくる棒を×の形にして交差するところをセロテープでとめた。そして、⑦<u>少し離れたところで観察していた筆者の方を向いて、「ほら、見て」「しゅりけんできちゃった！」と言った。</u>そして「シュッ！」と言って飛ばした。その後、⑧<u>周りのみんなにも聞こえるように大きな声で「これで、しゅりけんできちゃった！」</u>といいながら、飛ばして遊んだ。</p>
--

C 男は、初め、D 男と E 子の二人がはさみで遊ぶのをじっと見ていた。そして、その二人がいなくなるとすぐに、C 男は席を立て D 男が遊んでいたところへ移動し、はさみを手に取りリボンを切ろうとした（下線部①）。その時点で C 男の遊びはひとり遊びであるが、それまでそこではさみを使って遊んでいた友だち二人の他者の存在は重要なポジションを占めていると思われる。なぜならば C 男の行為は、自我が発達していく時に次々に現れる模倣行為である(ワロン, 1942/1976)。C 男は、すぐにはリボンをうまく切れなかったが（下線部②）、持っていたリボンにおいて別の新しいリボンを取り出した（下線部③）。これは、C 男が、自分の行為の結果を検証し、新しいリボンに変えるという修正を行ったと考えられる。何度もはさみをあてて擦れたリボンより新しい張りのあるリボンの方が切りやすいことを知っていたのか、あるいは、リボンを取り替えたことが偶然成功につながったかは、筆者には分からなかったが、結果的には、C 男の自発的な行為の修正が、はさみを上手に使えたという成功体験を C 男もたらしたことになる。

固い「広告のくるくる棒」を切る遊びでは、リボンの時のように、最初は片手ではさみを持って切ろうとしたが、うまく切れなかった（下線部④⑤）。C 男は、今度は、はさみを両手で持つという自己の行為

の修正の選択を行ったことで、固いものを切る成功体験をした（下線部⑥）。この成功体験の満足感が、その後の「ほら、見て」「しゅりけんできちゃった！」のC男の発話に表現されている（下線部⑦⑧）。はさみを使って、ひとりでしゅりけんが作れたという満足感は、ひとり遊びであるからこそ体験できる満足感であり、成功体験である。

事例2においても、子どもの遊びのプロセスから、行為者自身の自己内対話を推測し、ワロン『身体・自我・社会』（ワロン、1983）（p.117）の浜田のモデル（前出の図1）を援用して、一連の遊びのプロセスを表4に示した。

表4 第二の自我と対話しながら行為の修正を自発的に行う遊びのプロセス（事例2）

遊び	表出された行為や発話	自発的に自己の行為の修正を繰り返す自我	自己の行為を検証する第二の自我	他者
はさみ遊び	①	ようし、はさみで何か切ってみよう。	うまく切れるかな？	最初に遊んでいた友だち二人 （この時点では立ち去っている）
	②	あれ、うまく切れないな。どうしよう。 何度も切ろうとして、はさみをあてたから、リボンがよれよれになっちゃったぞ・・・ ↓ （修正）	どうして切れないの？  リボンを別なものにかえたほうがいいんじゃないかなあ・・・	
	③	よし、となりにある黄色いリボンを切ってみよう。  今度は違うものを切ってみよう。	あ、うまく切れたね！	
	④	すこし固いなあ。 うまく切れない。	うまく切れるかな？	
	⑤	↓ （修正） よし、両手で力を入れて切ってみよう。	頑張れ！頑張れ！力を入れて・・・両手で切ったほうがいいのかも・・・	観察している筆者  まわりで遊んでいる友だち
	⑥	ほらね、うまくいったよ！	あ、うまく切れたね！ 大成功だ！	
	⑦	しゅりけんできちゃった！	まわりの人にもできたことを知らせよう。	
	⑧	しゅりけんできちゃった！	しゅりけん作ったんだよ！	

C男は、はさみを使った遊びの中で、第二の自己と対話しながら自己の行為を自発的に検証し修正することによって、成功体験を積み重ねた。これは、ワロン（1942/1976）のいう、身体を通して自我を確立していく過程と見ることができる。

#### 4. 総合考察と今後の課題

選出した二つの事例を、ワロン（1976/1983）の「自己内対話」の理論を援用して考察した結果、子どもは「ひとり遊び」において、自己の行為の結果を検証する第二の自己と対話をしながら、誰に言われることもなく自分自身で自己の行為の結果を検証し、自分の理想とする行為とのズレを自発的に修正していると考えられる。また、その行為の修正の繰り返しの結果、子どもは「ひとり遊び」の中で、一定の満足感を得る成功体験を積み重ねていることも明らかになった。その一連の自発的な検証と修正の繰り返し、そしてその後の成功体験は、おそらく集団遊びで得られる充足感とは異なる「ひとり遊び」においてこそ得られる満足感であり、ワロンの考える身体を通して自我を確立していく過程の一端と考えられる。

近年の、子どもの遊び場の減少や家庭用テレビゲーム機等の登場による遊びの変化、さらには少子化の時代的背景も加わって、一世代二世代前には特殊であった「ひとり遊び」が、現在では、一般的になってきている（村瀬・落合, 2007, 井上, 2009）。そして、井上（2009）の、母親への子どもの遊びの意識調査によれば、ひとり遊びの増加を心配だと答えている母親も多い。しかし、本研究で明らかになった「ひとり遊び」における発達の意義は、「ひとり遊び」においても、そのプロセスにおいて自我の発達を促し、身体や社会性の発達へとつながっていく可能性が十分にあることを示唆している。ここで得られた知見は、ひとり遊びが気になるという養育者らに、新たな視点を与えるものであろう。今後は、さらに多様化された現代の様々な遊びにおけるひとり遊び事例を検討すると同時に、より年齢の低い幼児や年齢の高い小学生についても、「ひとり遊び」の発達の意義を検討し、本研究の妥当性や正当性を示していきたいと考えている。

#### 文献

- 新垣香代子・浦崎武. (2010). 学童期における高機能自閉症児と他者との関係性を育てる試み-自立活動「好きなこと時間」を通して-. 琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要, **1**, 41- 53.
- 浜野えり・佐藤眞子. (1988). 幼児のひとり遊びに関する一考察. 日本保育学会大会研究論文集, **41**, 8-9.
- 井上則子. (2009). 子どもの遊びに対する母親の意識：母親の属性からみた意識の差異. 発育発達研究, **44**, 16-23.
- 久保山茂樹・齊藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳. (2009). 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, **36**, 55-76.
- 牧野桂一. (2011). 保育現場における気になる子どもの評価と保育支援の在り方. 筑紫女学園大学短期大学部紀要, **6**, 1-14.
- 村瀬浩二・落合優. (2007). 子どもの遊びを取り巻く環境とその促進要因：世代間を比較して. 体育学研究, **52**, 187-200.
- Parten, M. B. (1932). Social participation among preschool children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **27**, 243-269.
- Piaget, J. (1968). 幼児心理学Ⅰ：模倣の心理学（大伴茂，訳）．名古屋：黎明書房．(Piaget, J. (1945). *La formation du symbole chez l'enfant*. Delachaux & Niestlé.)
- 柴山真琴. (2008). 子どものエスノグラフィー入門. 東京：新曜社.
- 進野智子・小川理恵・加藤千恵・川端紀子・松尾登紀子・松島綾・松永康代. (1993). 幼児の遊びに関する発達心理学研究-幼児のひとり遊びに関する研究Ⅰ-. 長崎大学教育学部教育科学研究報告, **45**, 231-242.
- 田窪みゆり・堀越紀香. (2012). 幼稚園児におけるひとり行動の変容と意味. 大分大学教育福祉科学部研究紀要, **34**,



223-236.

田辺正友・田村浩子.(1997). 自閉症児における行動特徴の発達変容. *奈良教育大学紀要*, **46**, 313-321.

上西知子.(2008). 「語り」から「制作過程とはどのような経験か」を考える. *美術教育学: 美術科教育学会誌*, **29**, 73-88.

内田伸子.(1989). 子どもの推敲方略の発達-作文における自己内対話の過程-*お茶の水女子大学人文科学紀要*, **42**, 75-104.

内田伸子.(2009). *発達心理学 ことばの獲得と教育*. 東京: 岩波書店.

Vygotsky, L. S. (1932/1967). *思考と言語*. (柴田義松訳) 東京: 明治図書.

Wallon, H. (1976). *認識過程の心理学*. (滝沢武久訳). 東京: 大月書店. (Wallon, H.(1942). *De l'acte à la pensée: Essai de psychologie Comparée*. Paris: Flammarion.)

Wallon, H. (1983). *身体・自我・社会: 子どもの受け取る世界と子どもの働きかける世界* (浜田寿美男訳編). 東京: ミネルヴァ書房.

付記

本研究の観察にご協力いただきました幼稚園の先生方、園児の皆様に感謝いたします。